

## 第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

父と生命保険

群馬県 伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

三学年

飯野 詩奈

六年前の夜中。眠っていた私は、人の声で目が覚めた。目を開けても辺りは真っ暗だからまだ起きる時間ではないはず、と不思議に思った。私は気になりつつも眠気には勝てず、また深い眠りに落ちていった。

翌朝、私は昨夜の騒がしさの理由を知った。突然、胸の苦しみを訴えた父が救急搬送されたのだ。幸い、病院での処置が早く大事には至らなかったが、父はしばらく入院する事になった。

小学生だった私は、父に起こった事が理解出来ず、ずっと不安な中にいた。母も、病院の付き添いや仕事や家事で、家に帰ってくると疲れた顔をしていたから色々と聞けなかった。私は家族に心配をかけない様にそれまで以上に明るく振る舞った。しばらくして、父は病状が落ちついたため退院出来た。その日の夜、夕食が終わっていつもの様にのんびり過ごしていると、父が話し始めた。一カ月後に手術が決まった事や、これから先も療養が必要な事などだった。そして、同じ様な事がまた起きたら命の危険があるかもしれないと聞き、驚きが隠せなかった。

明るく振る舞っていた私だが、ある時不安が込み上げてきた。浮かない顔の私に気付いた母が話してくれた。実は父は、もう何年も病氣と闘っている事。近い将来、家族を残して亡くなるかも知れないという覚悟を持っている事。そのため父は、万が一の時の事を考えて準備をしている事も聞いた。

その時、母が一冊のノートを見せてくれた。そこには父の字で、びっしり書き込まれていた。自分に、もしもの事があった時、どうすれば良いのか。この事柄には、こう対処して誰を頼りなさい等、具体的に書かれていた。そして別のページには数字とグラフが。どうやらそれは私達兄妹がこれから先に必要とするお金を試算して、年表の様にまとめたものらしい。父はずっと前から、自分が居なくなっても家族が生活に困窮する事がないように、生命保険に加入していたと教えられた。私達兄妹や母が残された時に、経済的な理由から進学を断念したり夢を諦めたりしないように、父はずっと準備して

## 第55回中学生作文コンクール

いたのだと知った。その事を知り、父や母の愛情を改めて感じた。一緒に生活している時は、仕事や家事をしてくれる。悩み事を聞いてくれる事もあるし、落ち込んだ時は励ましたりもしてくれる。そういう目に見える愛情しか知らなかった自分はまだまだ子供だったなあ、と情けなく思った。

この先、父の生命保険を使う時がくるかもしれない。それは同時に父の死を意味する事だから、悲しさが勝ってしまい、お金なんて、と以前の私なら思ったかもしれない。でも、父のノートを見てから、この生命保険は『夢を諦めず努力を続けなさい』という両親からの深いメッセージなんだと考えるようになった。

「お父さん、大丈夫。ちゃんとメッセージは受け取ったからね。その時が来ても、しっかり自分の道を真つすぐ進むよ。」

元気な家族と共に過ごせる事に感謝しながら、毎日を大切に生きていきたいと思っている。